

少女雑誌 *Atalanta* と読者の挑戦

牟田有紀子

はじめに

ヴィクトリア朝の中産階級の少女は日常的に日記や手紙を書いており、19世紀末になると、社会生活や宗教的な活動を記録するためだけではなく、個人的な考えや感情を書き留めることが多くなった (Kearney 32)。ヴィクトリア朝の少女は全寮制の学校に通っている兄弟のように離れて暮らす家族に手紙を送ることが多かったようだが、20世紀初頭になると、ガールスカウト活動で出会った友人のように、血縁者でも同じ地域に住んでいるわけでもない少女と手紙のやりとりをして友情を深めた (Kearney 33)。手紙が少女のコミュニティの形成と拡大に重要な役割を果たしていたのである。Mary Celeste Kearney は家族や友人への手紙を例として挙げているが、本稿では、ヴィクトリア朝の少女が雑誌に手紙を送っていたことに注目したい。

19世紀後半に出版されたターゲットを少女に絞った雑誌は、単に読み物を掲載するだけでなく、読者から送られてきた意見や作品を載せたり、読者のためのコーナーを設置したりすることによって、購読者を獲得、維持しようとした。読者は手紙を通して、雑誌に家族や友人に聞けないことを聞き、悩みを相談し、新しい情報を求めた。他の読者とも交流して、雑誌上でコミュニティを形成した。少女雑誌は読むことだけではなく、「書くこと」があって初めて紙面が成立するようになったのだ。雑誌もまた、少女の手紙文化の盛り上がりを証明する一証拠である。

少女雑誌の黄金期を作った *Girl's Own Paper*¹ (1880-1907; 以下 *GOP*) は、創刊間もなくから読者の悩み相談コーナー “Answers to Correspondents” や、文芸作品や手芸作品の出来を競うコンペティションを始め、読者が紙面作りに関わることを大いに歓迎した。教育や就労の拡大が進み、母親世代は経験しなかった少女時代を過ごしている19世紀末の読者にとって、雑誌は「少女とは何者か」「少女時代とはどう過ごすべきか」という議論を読んだり投稿したりする格好の場所となった。それが少女雑誌の盛り上がりを支える一因になったと言っても過言ではない。中でも、*GOP* のような保守的な雑誌とは一線を画し、新しい女ならぬ「新しい少女」像² を打ち出そうと試行錯誤していたのが、1887年から1899年まで出版されていた少女雑誌 *Atalanta*³ である。

*Atalanta*は10代後半から20代半ば向けの月刊誌で、一部6ペンス、64ページ程度だった。毎月、小説、エッセイ、詩、学校や職業、本の紹介などが掲載された。*Atalanta*は高等教育や専門職の普及に力を入れていたフェミニスト系少女雑誌で、少女が自分の能力を高めて社会進出できるよう導くことを使命としていた。そのため、中等教育を終えていたり、少なくとも初等教育を終えても勉強を続けていたりする志高い少女に向けた読み物が多い。したがって、教育に出資できる程度に裕福な家庭の少女が読んでいたものと思われる。*Atalanta*は高等教育や専門職に関する記事を頻繁に掲載し、読者に新しい時代の少女の人生の選択肢を提示しながら、それらが持つ悪印象の改善に力を注いだ。一方で、高等教育や就労が少女の心身にとって害にならないことを証明したいあまり、伝統的な「女性らしさ」の重要性を強調してしまっているという矛盾を抱えていることは指摘しなければならない。しかしこの矛盾は、女性の社会活動が制限されていた時代に*Atalanta*が生き残るための戦略だったとも考えられるため、一概に否定できるものではない。本稿では、*Atalanta*がその制限の中で使命を遂行するために、理想とする「新しい少女」をどのように描き出し、読者に実践させようとしたのか、読み物と読者との交流の両面から考察する。

1. 読み物に見る*Atalanta*の少女観と矛盾

まずは*Atalanta*の出版と少女を取り巻く社会状況について確認しながら、エッセイや詩などの読み物から*Atalanta*の使命意識を明らかにする。*Atalanta*の前身は、*Every Girl's Magazine* (1877-87; 以下EGM) という少女雑誌で、小説やエッセイなど様々な記事を掲載していたが、GOPと同様に少女の健康に焦点を当てることが多かった (Moruzi 120)。*Atalanta*は、EGMの編集長だったAlicia A. Leithと学校小説で有名な小説家L. T. Meadeの共同編集で始まった。創刊時から第一次フェミニズム運動に強く影響を受けており、読者に女性の高等教育や専門職の重要性を伝え、権利を行使するよう訴えた。Leithは1年で編集職を退き、代わりにJohn C. Stapleが共同編集者を務めたが、その1年後の年版にはMeadeの名前だけが編集者として記されている。1891年12月にAlexander Balfour Symingtonが編集長となって、彼が編集していた*Victorian Magazine* (1891-92)を*Atalanta*と合併した。92年にMeadeが編集職を退くと、高等教育や専門職を目指す志高き少女よりも、もっと広い層の少女に受け入れられるように保守路線に方向転換し、雑誌としての特色を失って、質も急激に下がった (Moruzi 120; Brake and Demoor 26)。そのため、本稿でも1892年以前に重点を置く。

*Atalanta*が野心的に女性の高等教育や専門職の情報を提供した一方で、同時代の少女雑誌は、高等教育や専門職に対して否定的、もしくはアンビバレントな態度を示し

ていた。 *Monthly Packet of Evening Reading for Younger Members of the English Church*⁴ (1851-99, 以下MP) は、作家 Charlotte M. Yonge が50年近く編集していた保守的な雑誌である。タイトルの通り英国国教会の教義を若者に説くための雑誌で、女性が家を離れて学校や仕事に行くことを肯定的に受け取ることはなかった。GOP は、高等教育や専門職に関する記事を定期的に掲載していたものの、その中には肯定的なものも否定的なものも含まれていた。GOP の場合、雑誌が記事を掲載するよりも、“Answers to Correspondents” で読者が教育や就労への興味を示すほうが早かった。少女向けのコンテンツが保守的になりがちな時代に、*Atalanta* は高等教育と専門職を肯定し続けた貴重な存在である。しかしながら、それは一筋縄ではいかない。*Atalanta* の抱える矛盾には、この雑誌が置かれていた不安定な立ち位置が表れている。次にその矛盾を検証し、この雑誌がどのような制限を受けながら活動していたのか確認する。

Kristine Moruzi は *Atalanta* が高等教育や就労への支持と同時に、伝統的価値観に基づく「女性らしさ」への固執を示していることについて、以下のように述べる。

Despite its support for girl's education, however, *Atalanta* was troubled by conflicted and sometimes contradictory response to these changes in girl's learning. Although it favoured education for girls, it remained cautious about the impact of this education and simultaneously tried to reinforce the traditionally feminine role of wife and mother. (Moruzi 115)

Atalanta は “the impact of this education” について懸念しているわけだが、これには根強く残っている女性の高等教育に対しての偏見が背景にある。

Emily Davies が1869年にヒッチンにコレッジを開校し、それが1873年にケンブリッジ大学のガートン・コレッジとなって、女性は初めて男性と同一の試験を受けることができるようになった。この時点では女性はまだ学位を貰うことはできなかったが、1878年にロンドン大学が全ての女子学生を正式に受け入れ、学位を授与することになった。つまり *Atalanta* が出版されていた頃には、女性が高等教育を受けられるようになって20年近く経っていたにもかかわらず、高等教育はまだ家庭重視イデオロギーを阻害するものとして敵視されていた。

ヴィクトリア朝社会の中産階級を支配していた家庭重視イデオロギーの下では、「『女らしさ』は、家庭への愛着、他者への奉仕、従順、弱々しさと同一視される」ものであり、「女性にとっての至高の目標は結婚と母性」とされていた（パーヴィス 5）。そのため、教育を受けた女性は「ブルー・ストッキング」、つまり「博識な知識で男性を震撼させ、女性から肉体的魅力を奪った怪物の代名詞」（パーヴィス 9）と

なり、女性の人生のゴールである結婚と母性からかけ離れた存在になってしまうとされていた。

GOPは先述の通り、賛否両論の記事を掲載していたが、1882年には“The Disadvantage of Higher Education”という記事を掲載し、下記のように、女性の高等教育が家庭にもたらす悪影響への嫌悪を示した。

It is a great thing to know the relation of one angle to another; but it is not every mathematician who brings her knowledge to a practical issue with regard to tables and chairs, or can tell whether a room has been properly dusted or not. Woman was created as an helpmeet for man, not as his equal or rival; and woman nowadays is very apt to forget that fact⁵. (M. S. P. 333; vol. 3)

この記事は、女性が本来家庭に割くべき時間が疎かになったり、男性と競う存在になったりするという家庭重視イデオロギー下での高等教育のデメリットを示している。この論理がまかり通っていた時代に、*Atalanta*はどのような戦略で、高等教育や専門職を推進しようとしたのだろうか。そして家庭重視イデオロギーとどのように折り合いをつけていたのだろうか。

結論から述べると、*Atalanta*は高等教育や専門職を経験しても、女性らしさは失わないし、結婚もできるという、先進性と保守性を並行して論じていくという方針を取った。女性を家庭から解放しようという動きと、女性を家庭に閉じ込めようとする矛盾する態度を取ることを選択したということである。このアンビバレントな態度は、雑誌のタイトルと、第1号の表紙に描かれた詩からも読み取ることができる。

この雑誌のタイトルになっている *Atalanta* とは、ギリシア神話に登場する狩人である。彼女は徒競走で自分に勝った者と結婚し、負けたものは殺すと宣言して、何人もの求婚者を退けてきた。求婚者の一人である Hippomenes は、女神 Aphrodite に協力を依頼し、黄金の林檎を3つ与えられた。Hippomenes は競争の最中、*Atalanta* に抜かれそうになると林檎を彼女の足元に落として先にゴールし、*Atalanta* を娶ることが許された。この神話に基づき、自分の人生を自分で決める女性の象徴として *Atalanta* が雑誌のタイトルに採用されている。しかしながら、この神話の結末は、結局のところ結婚である。この点について、*Atalanta* の第1号の第1ページ目に掲載されている詩 “*Atalanta*” の後半には次のように書かれている。

Oh, girls ! 'tis English as 'tis Greek !
Life is that race ! Train so the soul
That, clad with health and strength, it seek

A swifter still, who touches goal
 First; or—for lack of breath outdone—
 Dies gladly, so such race was run !

Yet scorn not, if, before your feet,
 The golden fruit of Life shall roll,
 Truth, duty, loving service sweet,
 To stoop to grasp them ! So, the soul
 Runs slower in the race, by these;
 But wins them—and Hippomenes ! (Arnold 3; vol. 1)

この詩は、詩人、ジャーナリスト、東洋学者の Edwin Arnold からの寄稿である。引用の前半では “Life is that race !” であり、男性との競争によって自分の人生を決める *Atalanta* と新しい時代の少女を讃えているが、後半では主張が変わる。男性である Hippomenes によって、女性の *Atalanta* を躓かせ、競争から脱落するよう仕組むために放たれた林檎は “Truth, duty, loving service sweet” だとされている。これは女性が男性と同じ土俵に立つことを阻む足かせとなっているもの、つまりパーヴィスがいうところの女性らしさの象徴「家庭への愛着、他者への奉仕、従順、弱々しさ」にあたるものだと考えられる。この詩は、競争中に甘んじてそれらを拾い、勝利の代わりに結婚を手に入れよと読者に説くのだ。Moruzi が “Arnold privileges feminine duties over *Atalanta*’s physical prowess and wishes to convince the girl reader that these ‘fruits of Life’ are everything she should hope for” (122) と述べているように、*Atalanta* は確かに志高き少女を支持しているが、同時に結婚が最終的なゴールであるという方針を、この詩によって表明しているのである。もちろん、この時代に「女性らしさ」を捨てて生きることを推奨できるはずもない。矛盾を抱えながらも、高等教育や専門職につきまとう、結婚の邪魔になるというイメージを払拭し、新しい女性の生き方の普及に努めるのが、この雑誌の使命だったのである。

この方針は、大学紹介の記事や女子大学生が主人公のフィクションにも表れている。例えば、Meade がガートン・コレッジとニューナム・コレッジについて寄稿しているが、いずれも高等教育が家庭生活の邪魔にはならないこと、大学は家のように居心地が良いことが強調されている。1894年掲載の “The Girton College” という記事には、大学についてよく知らない読者のために、設置されている科目、生活環境、一日のスケジュール、奨学金、クラブ活動についての情報が詳細に書かれている。次の引用は、その記事の締めくくの一節である。

The Girton girl and her many sisters in the other Colleges are proving more and more every day that Knowledge means Light, and Ignorance Darkness. Being trained to use her intellectual faculties in one direction helps her to use them in others, and if domestic life is to be her happy lot, she will perform her home duties none the worse for being able to solve a problem in Euclid, or construe a Greek sentence. (Meade 331; vol. 7)

勉強や学生生活についてだけではなく、最後に大学生生活で得た知識や姿勢が家庭生活にも活かされるのだと念押しして、読者を安心させようとしているのだと考えられる。

専門職についても、*Atalanta*が示す懸念は高等教育と根本的には同じで、中産階級の女性が、賃金が発生する労働に従事するのは「女性らしさ」に欠けると見なされてしまうという点にある。一方で、教育を受ける人口が増えれば、その受け皿となる仕事の需要が高まるため、様々な雑誌で、中産階級の女性が従事してもリスクタビリティを失わない仕事を紹介された。これによって、経済的に自立したい女性が世間体を保ちながらできる仕事を得る機会が拡大した (Beetham 141)。

*Atalanta*は、第2号から“Employment for Girls”という職業紹介の記事を11回連載した。伝統的に中産階級の女性ができる仕事として認識されているガヴァネスや教師ではなく、看護師や薬剤師、通信省職員、タイプライター、クロモリトグラファー、速記者、ドレスメーカーのように、資格や訓練が必要な職業についての情報を提供した。この連載は、例えばMillicent Garret Fawcettが通信省についての記事を寄稿しているように、実際にその仕事に就いている人や関係者を招いて、専門的な見地からの情報を提供している。針仕事は目新しいものではないように思われるかもしれないが、ここではお針子としての仕事ではなく、針仕事を必修科目とする学校が増えているため、針仕事を教育する側の仕事として取り上げられている。看護師については、Workhouse Infirmary Nursing Associationの名誉幹事であるJane Wilsonを招き、看護職が専門職としてどのような資格取得と訓練を必要とするかという、かなり詳細な情報が書かれている。また、看護師は“sound health, firm purpose, cultivated minds”を持ち、組織の一員として“practical; apt to learn, willing to obey” (Wilson 115; vol. 1)であることが求められる、という人格的な資格についても説明している。伝統的に女性の仕事として見なされていた針仕事や看護職にも、教育や資格という新しい視点を加え、その専門性の高さを強調している。

“Employment for Girls”で取り上げられているような、女性の領域から出ないとされている仕事については、*Atalanta*は手放しで称賛しているように見える。しかし、男性と同じ仕事については、その態度を貫くことができない。その例として、ジ

ジャーナリストを取り上げる。

19世紀末はジャーナリストという仕事が徐々に女性にも浸透し始めた時代で、女性が女性や子ども向け雑誌の編集長に就くことは珍しくなかった。時には批判の対象になったが、一般紙が女性を迎えることもあった。*Atalanta*は“Practical Journalism”, “Practical School of Journalism”, “School of Journalism” というタイトルで、15回にわたり女性がジャーナリストとして働くことについて連載している。内容はジャーナリストとしての文章の書き方、例えばあらすじ、インタビュー、女性用コラム、ファッションコラムの書き方、オフィスでの仕事などについて細かく書かれている。この連載の最後となる記事で、ジャーナリストを目指すうえでの最高目標が設定されている。それは以下の引用の通り、「副編集長」になることである。

Every profession has its ambitions; goals which every member of them aims at reaching. One of the ambitions of the journalist is the post of sub-editor' because they might can get the position of sub-editors with their efforts. (685; vol. 11)

あえて副編集長だと指定するのは、“The sub-editor is the man or woman . . . who remembers all the things the Editor forgets, and on whose shoulders falls the burden of the day, without the distinction of the mantle of fame” (686; vol. 11) だからである。つまり、副編集長になると、責任ある仕事をしながらも、男性である編集長を支えるという女性としての役目を果たすことができるのである。この雑誌の初代編集長2人も女性だったにもかかわらず、編集長を目指せとは言わない。この慎重さに *Atalanta* の限界が表れている。

以上のように、*Atalanta* は、親世代が知らないであろう教育や就労についての情報を大量に発信し、読者にこれまでの少女とは異なる生き方を選ぶよう鼓舞した。一方で、男性の領域を侵して社会システムを壊すようなことは決して推奨しなかった。これが当時のフェミニスト系の少女雑誌にできた最大限の活動だったと思われる。*Atalanta* が示したこの先進的ながらも曖昧なところが残る態度について、読者はどのように反応し、議論したのだろうか。次節では、読者の活動に焦点を当てる。

2. 読者と作る新しい少女像

19世紀の女性雑誌が、読者と編集者の交流のページを持つのは珍しくない。Margaret Beethamによると、18世紀末から19世紀初頭にはすでに、女性向けの家庭雑誌が読者からの手紙を利用して道徳や女性らしさを説くという体制ができあがっ

ていた(23)。

読者の声をどのように使うかには、それぞれの雑誌が持つ、読者と編集者の関係性への考え方が色濃く表れる。GOPは女子教育に関する質問が増え始めると、“Answers to Correspondents”に教育や就労専用のセクションを設けるようになった。これは、GOPは読者がどのような話題に興味を持っているかを加味しながら紙面構成を考えていたことを示す。月刊誌*Girl's Realm* (1898-1915, 以下GR)は、GOPやMP、*Atalanta*と比べると商業雑誌であることを隠さず豪華賞品を用意して、貪欲に読者を集めた。このことからGRは、少女を理想の女性像へと導くべき存在というよりも、消費者として見ていたのだと言える。そして*Atalanta*は、読者を議論の相手であり、*Atalanta*の主張を補強する存在として見ている。

*Atalanta*には、主に三つ読者が参加できるコーナーがある。一つ目は第1号から始まった有料文芸批評クラブの“*Atalanta Scholarship and Reading Union*”である。ここでは著名な作家や批評家による文学の講義が掲載され、その内容に関する問い“*Scholarship Competition Questions*”が設定されている。読者は自分の意見を書いて送り、高評価を得た読者は名前が掲載された。二つ目が“*Our Prize Competition*”である。毎月様々な質問が出されて、好きなものに投稿できる。三つ目は、“*The Brown Owl*”と“*The Atalanta Letter-Bag*”である。1889年10月に始まった“*The Brown Owl*”では、編集者や作家、批評家がとあるテーマの文章を寄稿する。それに対して、読者は意見を書いた手紙を送ることができる。“*The Atalanta Letter-Bag*”は、“*The Brown Owl*”に送られてきた読者の手紙を転載するコーナーで、1889年12月から始まった。読者の手紙に対して時々編集者のコメントが添えられている。大なり小なり編集者が手を加えていたとしても、読者の手紙を転載し、編集者の意見と読者の意見を並列して見ることができるのは非常に興味深い。この三つを合わせると10ページ近くにもなる。いかにこの雑誌が読者の参加を望んでいたかがうかがえる。

これらの三つに共通するのは、いずれも新しい時代の少女の生き方やイメージを再構築しようという試みが見られるという点である。特に読者との双方向コミュニケーションを取ることができる“*Atalanta Scholarship and Reading Union*”と“*The Brown Owl*”, “*The Atalanta Letter-Bag*”について、実際の読者の活動に焦点を当てながら、それぞれの役割と読者が参加する意味を詳しく検証する。

少女の知性を養うという使命を持った*Atalanta*にとって、毎月必ず掲載されている“*Atalanta Scholarship and Reading Union*”は、読むべき本を適切な方法で読むための指導をする場である。創刊から4年間は“*English Man and Woman in the 19th Century*”というシリーズになっており、19世紀の作家が多く取り上げられている。例えば第1号でのAndrew LangによるSir Walter Scottについての講義を

皮切りに、Richard Garnett が Samuel Taylor Coleridge, Anne Thackeray が Jane Austen, R. E. Francillon が Charles Dickens, Yonge が John Keble, Thomas Hughes が Charles Kingsley について書いている。Dickens の回を例に挙げてみると、Francillon は下記のように Dickens を評価している。

In short, he holds a unique position among the writers of this century. Much of the finest, highest, and best literary work is too fine and too high for general appreciation. The grand peculiarity of Dickens is this, that he is popular in the very largest way while satisfying even those fastidious critics who distrust what is widely popular. Man has been defined as “the laughing animal” : and everybody who really knows how to laugh, however cultured, or however ignorant, is ready to be a disciple of Dickens, and a citizen of his world. (Francillon 350; vol. 1)

Francillon は Dickens の作品が、他の優れた文学作品と比べて一般大衆に受け入れられやすく、かつ批評家も満足させるに足る理由がそのユーモアセンスにあるとして、そのユーモアがどのように描かれているのかを、4ページにわたって批評している。

その後には以下のような “Scholarship Competition Questions” が設定されており、読者は *David Copperfield* (1849) を読んで3問のうち一つを選び、500ワード以内でエッセイを書いて送る。

- I. “Pathos is the secret of the in-looking contemplative spirit, and Dickens shows no signs of looking deeper than his eyes could see.”
- II. “We are becoming such a flock of sheep, that the more pronounced characters seem to us much more caricature-like than they really are.”
- III. “Charles Dickens succeeded in showing a curiously stupid grown-up world what a child’s needs, and wrongs, and rights, are. . . . That is a great thing to have done.” (353; vol. 1)

初等教育を終えただけでは到底説得力のある答えを導き出すことができないような問いではないだろうか。“*Atalanta* Scholarship and Reading Union” にはもう一つ “Search Passages in English Literature” というコーナーもある。文学作品の一節だけが載っていて、誰の何という作品のどこに書いてあるかを当てなければならない。いかに *Atalanta* が教養ある読者層をターゲットにしても、全てを簡単に答えることはできないだろう。*Atalanta* は毎月の課題をこなすために、読者にかなりの努力

を要求した。

さらに、このコンペティションには、誰でも参加できるわけではない。ここに *Atalanta* 独特の読者との交流方法がある。“*Atalanta Scholarship and Reading Union*” は有料で、年会費2シリング6ペンス払って“*Simple Subscriber*”になると、コンペティションに参加することができる。5シリング払って“*Privilege Subscriber*”になると、送った批評が添削されて返ってくる。つまり批評の通信教育が行われているのだ。入会資格は25歳未満であることで、毎月50名程度が優秀者として“*Honour List*”に掲載される。このリストに名前が載る回数が多かった読者は、その年の最優秀者を決める年次大会に進むことができる。年次大会では1年間のテーマを網羅する問いが出され、最優秀賞に選ばれるとエッセイが全文掲載される。さらに、年額30ポンド、3年間有効の「奨学金」が授与される⁶。2位が15ポンドの賞金、3位が5ポンド相当の書籍を贈られる。前出の“*Employment for Girls*”を参照すると、病院 (hospital) で勤務する一般看護師の年収が25ポンドから35ポンドであるとされている (Wilson 114; vol. 1)。看護師の年収と同程度の額が支給されるコンペティションは、同時代の少女雑誌では他に例がない。“*Search Passages in English Literature*”でも賞金は2ギニーまたは1ギニーで、“*Our Prize Competition*”は1ギニーまたは半ギニー分の本である。中産階級の少女が金銭を目当てに活動することはリスペクタビリティに欠けるため、あくまで「奨学金」として支給されている。学びのためという大義名分を得た読者は、安心して批評活動に取り組み、同世代の少女たちとの競争を楽しむことができただろう。また、このコンペティションには男性は参加しない。少女だけの世界で競い合う環境を提供することで、前節で考察したような男性と競い合うことのデメリットと不安から解放された。

“*Atalanta Scholarship and Reading Union*”に熱心に投稿したからといって、簡単に作家や批評家になれるわけではない。しかし、このコンペティションに参加して、その後も作家として活動した人物もいる。それがFFlorence Mary Wilson⁷とEvelyn Jane Sharpである。

*Atalanta*でのWilsonの活動について詳細に調査している加塩里美によると、Wilsonは当時23歳で、初年度の12回中11回“*Honour List*”に入賞し、1887年から1888年の最優秀者に選ばれ、奨学金を獲得した(「雑誌『アタランタ』と女性たち」63)。彼女の受賞エッセイは1889年3月号に全文が掲載されている。このエッセイについて、審査員を務めたKing's College Schoolの校長Thomas Henry Stokoeは、入賞者発表の際に次のような講評を残している。

Many of the Essays submitted to me were very creditable, and showed a competent knowledge and appreciation of the books proposed for reading

during the year. Some compositions were marred by inaccuracies, and others by an affected style. The chief defect however, was want of method. There was a tendency to ignore the heading, and simply to write a brief review of each author, with little or no reference to the actual subject proposed. The Essay which entitles the writer to the Scholarship was very satisfactory in every way. It was thoughtful and sensible, and the style clear and good. That placed next was equally creditable in some respects, but erred in being too discursive. The other three selected gave proofs of an intelligent study of the books. (Stokoe 365; vol. 2)

この講評により、次号に掲載された Wilson のエッセイが “very satisfactory in every way” であり、彼女が *Atalanta* の熱心な読者の中でも、最も優れた読者であることが明確になった。初年度の講評では “There was a tendency to ignore the heading, and simply to write a brief review of each author, with little or no reference to the actual subject proposed” という指摘もあり、表面的な批評は減点対象になることも明かされた。他の読者は Stokoe のコメントと、Wilson のエッセイを指標として次年度のコンペティションを迎えたことだろう。

Wilson は奨学金獲得後、1891年に Macmillan から *A Primer on Browning* という Robert Browning の入門書を出版している。この本は1892年2月の “The Brown Owl” で紹介されており、翌月にこの本の著者が “Atalanta Scholarship and Reading Union” の初代最優秀賞者であることが報告されている（加塩, 『ジェイン・エア』とその娘たち』102）。

もう一人の Sharp は過激派の女性参政権活動家、フェアリーテールの作家として知られている。伝記によると、彼女は若いころ勉強に没頭し、Cambridge Higher Local Examination を歴史で受験して合格した (John 11)。兄が寄宿学校や大学に進学する一方で、Sharp は少女に教育は必要ないという理由でそのような機会を与えられず、“clever” であるより “good” であることを求められる性に生まれたことに怒りを覚え、その結果、女性の高等教育の拡大を提唱し始め、*Atalanta* の読者となった (John 11)。Sharp は1887年から4年間、“Atalanta Scholarship and Reading Union” で批評の訓練をした。例えば、1888年は、Browning, George Eliot, Alfred Tennyson がテーマのときに “Honour List” に挙げた。Wilson が最優秀賞だったとき、Sharp は上位入賞を逃して Class I の Division I に入った。1890年から91年の年次大会で第3位に入賞したのが最高で、最優秀賞に選ばれることはなかったが、4年連続で年次大会に進んでいる優秀なメンバーの一人だったと言えるだろう。彼女もまた、この後作家デビューするが、そのきっかけを作ったのは *Atalanta* だっ

た。1892年に“The Wraith of Turville”, 93年に“The Sufferings of the Artist’s Friend”という読み切り小説を寄稿し, 95年, 96年には連載も持っていた。*Atalanta*での修行の後, 98年には代表作の一つ*All the Way to Fairyland*を出版している。

彼女たちのように, 年会費を支払って, *Atalanta*が10代から20代前半の少女が読むべきと考える本を全て読み, 毎月500ワードのエッセイを書き, 年次大会の2000ワードのエッセイを提出し, 作家デビューするというのは, まさに*Atalanta*の理想とする読者教育の成功例だっただろう。彼女たちの存在は, 学びと訓練を継続し, 自立と社会進出を目指すという, この雑誌が求める少女時代のあり方を体現しているのだ。

“Atalanta Scholarship and Reading Union”については, 読者がいかに編集者や作家が求める理想の少女像に近づき, その理念を体現する存在となり得たかという点に焦点を当てたが, 次に自由な意見を求められたときの読者の反応と雑誌の対応を検証する。

“The Brown Owl”は1889年10月から始まった企画で, 10代から20代前半の少女にとって喫緊の課題を一つ取り上げ, 編集者や有識者が意見を述べる。時には読者の手紙を引用することもある。どんなテーマが取り上げられるかには雑誌の編集方針が大きく関わっており, Meadeが編集に携わっていた時代は教育や職業がテーマになることがあったが, 時代を下るにつれ, 料理やドレス, ガーデニングなどドメスティックなテーマに変化した。“The Brown Owl”は, 大人が意見を述べるだけの場ではなく, “This paper invites discussion” (Mead 51; vol.3)と書いてある通り, 読者との自由な議論を求めている。これも毎月掲載されていたコーナーだが, その中でも最も議論が白熱した1890年4月と7月の“The Forgotten Graces”の回を取り上げ, 読者の反応と, そこから見える*Atalanta*の戦略を表出させる。

先述の通り, 高等教育の拡大は*Atalanta*の最大の目的であり, そして高等教育が持つ悪印象は最大の障壁である。このイメージを払拭するために, *Atalanta*が採用したのは炎上商法だった。“The Forgotten Graces”は, 東洋学者Robert Kennaway Douglasによる“The Brown Owl”への寄稿文である。Douglasはこれ以外にも*Atalanta*に寄稿したことがあるためその先進的な性格を知らなかったはずはないわけだが, 彼はあえて女性の高等教育を, 社会秩序を破壊するものとして厳しく非難している。Douglasが言うには, 性別にかかわらず経済的な自立が求められる社会では, 中産階級の少女が勉強でも就職でも競争させられていることが問題である。教育がそのような仕組みをもたらした諸悪の根源であり, 競争して職を手にするものは“evil”である (459; vol. 3)。Douglasは“the girl who has unduly developed her intellect at the expense of those accomplishments which naturally belong to her

sex, has lost that which leaves her poor indeed. And may not this be one reason why the percentage of marriages is less than it was formerly” (460; vol. 3) と述べ、結婚率が下がっている原因は、本来女性が「自然に」持っているはずの高貴さ、清らかさを奪っている高等教育にあると結論付けている。この意見は前出の“The Disadvantage of Higher Education” と似ている。GOPではその記事に対するアクションはないため、そのような意見があることを雑誌自体が受け入れていると思われる。一方で、知性と「女性らしさ」の共存は可能であると他のエッセイ等の読み物で主張してきた *Atalanta* が、Douglasの意見に全面的に賛同して、“The Forgotten Graces” を掲載したとは考えにくい。そのため、読者の反応を見ると、これが新しい時代の「女性らしさ」とは何なのかという議論を白熱させるための炎上商法に思われるのである。

“The Forgotten Graces” の第2弾は1890年7月に掲載された。そこではDouglasが読者の反応についてコメントしている。彼が言うには、第1回の論旨に賛同した読者もいたが、目立つのは憤慨する読者の多さだった。読者が非難したDouglasの主張は、一つは女性が男性の引き立て役として作られているというもの、もう一つは高等教育のせいで結婚率が下がっているというものだった。Douglasも彼の主張への反論を非難しており、Douglasと読者の意見の相違が明らかになっている。

読者の手紙は1890年9月の“The Brown Owl” に2通、“The Atalanta Letter-Bag” に4通掲載されている。“The Brown Owl” に載っている手紙は、Meadeが意図的に選んだものである。Meadeはどのような手紙を、読者の声を代弁するものとして選んだのだろうか。

“The Brown Owl” に載っている最初の手紙は、C. G. Luardという読者のものである。手紙によると、Luardは3年間実際に大学に通ったことのある人物で、その視点からDouglasの論に対して次の4点を批判している。“1. That ‘the whole system is one of rivalry.’ 2. That it is ruinous to health. 3. That it produces cram, not culture. 4. That ‘the graces’ are ‘forgotten.’” (767; vol. 3) 彼女は、一つ目の問題について、女性が大学に進学する目的は、男性と競争することではなく、“The highest recognised standard” (767; vol. 3) のもとで自分の知識を試すことであると定義している。二つ目の問題については、Henry Sidgwick夫人の調査に言及しながら、大学に進学したために健康を損なった人はいないと主張している。三つ目と四つ目の問題については、多少知識の詰め込みが発生することは否定していないが、大学教育では“expressing your thoughts ‘with correctness and elegance of diction,’ is one much cultivated and insisted on” (767; vol. 3) が非常に重要視されており、優雅さが忘れ去られるどころか強化されていると述べている。*Atalanta* の使命をよく理解しており、読者を代表するのに相応しい主張だろう。

2通目の手紙はNot An Indignant Oneというペンネームの人物から送られてきており、この人物はDouglasの意見を強く非難はしていない。むしろ彼女は女子教育が行き過ぎると、心が狭くなってしまうとDouglasに賛同しており、理想の女性像とは“strong-minded, but truly feminine; clever, but not of necessity intensely learned; firm, yet gentle; practised in all those virtues which fit her to be the complement of man” (767; vol. 3) だと主張した。彼女の意見は、Luardの意見と真っ向から対立するようなものである。“The Brown Owl”に掲載されている2通の手紙に、Douglasの意見を否定するものと肯定するものが選ばれていることに、女性の高等教育を、保守的な意見に耳を傾けながらも、あくまで共存の道を探求しようとしていたAtalantaの戦略を見出すことができる。

しかし、Douglasへの意見はこの2通だけではない。“The Letter-Bag”の4通はDouglasの意見を否定するものばかりである。一つ目の手紙は、“Atalanta Scholarship and Reading Union”で活躍したSharpのものである。彼女がAtalantaに熱中していた経緯を考慮すると、Douglasの意見には到底賛同できなかっただろう。Sharpの手紙は全体を通じて攻撃的で、どんな世代にも“foolish women” (770; vol. 3) はいるし、名作を読んで士気が高まらない人を気の毒に思うと、教育の必要性を理解できない人々を痛烈に批判している。次の手紙はA. Z.というペンネームの人物から送られてきたもので、次の引用のように、男女は平等であると主張した。

Now women know their own sphere quite as well as men know theirs, and are as competent to choose their own occupations and methods of education as men. Woman is a co-ordinate sex with man, created equally in God's image and with the same rights to freedom of choice in the direction of her own affairs as man. This freedom is indispensable, and must be won at any cost, even at let of a decline in the percentage of marriages, which, let me say in passing, is at least as likely to be caused by the will of women as by that of men. (A. Z. 770; vol. 3)

男女は平等であり、結婚率を犠牲にしても自由は勝ち取らなければならないというこの意見は、Douglasへの手紙の中で最も現代的かもしれない。三つ目、四つ目の手紙はいずれも教育の継続と「女性らしさ」の減少には因果関係はないと主張するものである。MoruziはLuardとNot An Indignant Oneの手紙を、伝統的「女性らしさ」の根強い力を証明してしまうものと指摘しているが (Moruzi 128)、A. Z.の手紙には言及していない。A. Z.の手紙は、男女にはそれぞれの領域があることを認めてはいるものの、結婚よりも勝ち取った自由を重視するという、他の読者よりも一歩進んだ

考え方を持つ読者がいることを明らかにしている。

MeadeはLuardとNot An Indignant Oneの手紙は長すぎて“The Atalanta Letter-Bag”に入りきらなかったため“The Brown Owl”に載せたと書いている(767; vol. 3)。また手紙の内容については“For my part, I feel deeply grateful to Professor Douglas for giving us such an interesting subject to consider. I should be glad to receive suggestions from any readers of *Atalanta* with regard to questions of the day that the Brown Owl might discuss”(768; vol. 3)と中立的な立場を示し、興味深い議論ができたことへの謝意を表すのみである。しかしながら、LuardとNot An Indignant Oneの手紙を読者の声代表として“The Brown Owl”に載せ、SharpやA. Z.の手紙は“The Atalanta Letter-Bag”に載せていることには、Meadeの意思を感じる。つまり、保守的な意見に目くばせをしつつ、Meadeが書いた記事が示すような教育と「女性らしさ」の共存を強く訴えるものを読者の代表として採用しているのだ。*Atalanta*はこのようにして読者の声を利用して、読者がある意味共犯関係に持ち込みながら、雑誌の求める理想の少女像を読者が内在化し、彼女たちの投稿に発現するのを確認しているのである。

おわりに

本稿では、*Atalanta*が高等教育や専門職の拡大を推進しながら、教育を受けて働く女性は「女性らしさ」を失って結婚できなくなるというイメージを払拭するために、読み物と読者との交流との二つの面から取り組んでいたことが明らかになった。*Atalanta*はガートン・コレッジをはじめとした女性用大学コレッジの紹介、ガヴァネスや教師のような伝統的な女性の職業だけではなく、新たに開かれた専門職の紹介に努めた。そこから見える*Atalanta*の方針とは、知性と「女性らしさ」の共存は可能であるというものだった。この方針の実践と証明のために、*Atalanta*は読者に雑誌への参加を推奨した。

“Atalanta Scholarship and Reading Union”では、奨学金を与えるという大義名分のもと読者に毎月の投稿を求め、年間5シリングを支払う読者には通信教育を提供した。その結果、入賞者から作家を輩出し、雑誌の教育方針が適切に機能していることを読者に印象付けた。また、“The Brown Owl”と“The Atalanta Letter-Bag”では、読者に議論に参加するよう求めた。教育と「女性らしさ」がテーマになったときには、炎上商法に近いやり方で議論を盛り上げた。Douglasのような大人の男性を仮想敵とすることで、*Atalanta*の精神を理解する読者は一致団結したことだろう。

初期の*Atalanta*は、高等教育や専門職を推進したいあまり、伝統的「女性らしさ」の重要性を強調してしまうという矛盾点を抱えつつも、読者を教育し、読者の声を引

き出し、「新しい少女」像を作り出そうと挑戦し続けた、実験的で勇敢な雑誌だったと言っていいだろう。

(本稿はJSPS科研費 19K13111 (イギリス少女雑誌における「新しい少女」と「新しい読者」の形成)の助成を受けている。)

《註》

1. *Girl's Own Paper*というタイトルは1880年から1908年10月まで使用された。1908年11月から1927年までは*Girl's Own Paper and Woman's Magazine*, 1928年から1930年までは*Woman's Magazine and Girl's Own Paper*, 1931年から1947年までは再度*Girl's Own Paper*, 1947年から1950年まで*Girl's Own Paper and Heiress*, 1951年から1956年の廃刊まで*Heiress*というタイトルが使われた。本稿におけるGOPとは、基本的に初代編集長Charles Petersが亡くなり、編集長が交代になった1908年までのものを指す。
2. 「新しい少女」という語は、以下のSally Mitchellの定義に基づいて使用している。

The new girl—no longer a child, not yet a (sexual) adult—occupied a provisional free space. Girls' culture suggested new ways of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women (except in the case of the advanced few). (Mitchell 3)

*Atalanta*は、高等教育や専門職の普及を通して、“new ways of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women”を打ち出し、「新しい少女」を肯定的に捉えようとしていた。

3. 本稿では、一年分をまとめて出版した年版から全て引用している。
4. タイトルは1866年に*Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church*に変更された。
5. “Woman was created as an helpmeet for man”となっているが、これは原文のままである。
6. 3回目からは最優秀賞が20ポンドの奨学金を2年間、2位が10ポンドに減額された。
7. FFlorenceとなっているが、これは原文のままである。

《引用文献》

- Arnold, Edwin. “*Atalanta*.” *Atalanta*, vol.1, no. 1, Oct. 1887, p. 3.
- A. Z. “The *Atalanta* Letter-Bag.” *Atalanta*, vol. 3, no. 36, Sept. 1890, p. 770.
- Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?: Domesticity and Desire in the Woman's Magazine, 1800-1914*. Routledge, 1996.
- Brake, Lauel and Marysa Demoor. *Dictionary of Nineteenth-century Journalism in Great Britain and Ireland*. Academia Press and The British Library, 2009.

- Douglas, Robert Kennaway. "The Brown Owl: The Forgotten Graces." *Atalanta*, vol. 3, no. 31, Apr. 1890, pp. 459-61.
- . "The Brown Owl: The Forgotten Graces II." *Atalanta*, vol. 3, no. 34, July 1890, pp. 642-44.
- Francillon, R. E. "Atalanta Scholarship and Reading Union. The Men and Women of Letters of the 19th Century. VI. Charles Dickens." *Atalanta*, vol. 1, no. 6, Mar. 1888, pp. 349-53.
- John, Angela V. *Evelyn Sharp: Rebel Woman, 1869-1955*. Manchester UP, 2009.
- Kearney, Mary Celeste. *Girls Make Media*. Routledge, 2006.
- Luard, C. G. "The Brown Owl." *Atalanta*, vol. 3, no. 36, Sept. 1890, pp. 767-68.
- Meade, L. T. "The Brown Owl." *Atalanta*, vol. 3, no. 25, Oct. 1889, p. 51.
- . "The Brown Owl." *Atalanta*, vol. 3, no. 36, Sept. 1890, pp. 767-68.
- . "The Girton Girl." *Atalanta*, vol. 7, no. 77, Feb. 1894, 325-31.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- Moruzi, Kristine. *Constructing Girlhood through the Periodical Press, 1850-1915*. Routledge, 2012.
- M. S. P. "The Disadvantages of Higher Education." *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 112, 18 Feb. 1882, p. 333.
- Not An Indignant One. "The Brown Owl." *Atalanta*, vol. 3, no. 36, Sept. 1890, pp. 768.
- "Scholarship Competition Questions." *Atalanta*, vol. 1, no. 6, Mar. 1888, p. 353.
- "The School of Journalism: General Office Work." *Atalanta*, vol. 11, no. 132, Sept. 1898, pp. 685-86.
- Sharp, Evelyn. "The Atalanta Letter-Bag." *Atalanta*, vol. 3, no. 36, Sept. 1890, p. 770.
- Stokoe, Thomas Henry. "Atalanta Scholarship Competition, 1887-1888." *Atalanta*, vol. 2, no. 17, Feb. 1889, p. 365.
- Wilson, Jane. "Employment for Girls." *Atalanta*, vol. 1, no. 2, Nov. 1887, pp. 112-15.
- 加塩里美「雑誌『アタランタ』と女性たち」『地域政策科学研究』第11号, 鹿児島大学, 2014年, pp. 55-77。
- 。「『ジェイン・エア』とその娘たち：ヴィクトリア時代の文献に現れる女性の姿」鹿児島大学人文社会科学研究所博士論文, 2015年。
- パーヴィス, ジューン『ヴィクトリア時代の女性と教育 — 社会階級とジェンダー』香川せつ子訳, ミネルヴァ書房, 1999年。